近代建築史圖集

新　訂　版

日本建築學會編　彰國社刊

まえがき

日本建築学会は，1954年にはじめて「近代建築史図集」を刊行し，さらに1966年同書を全面的に改訂・刊行した。

けれどもその後，欧米および日本の近代建築史研究は著しく深まり，また幅を広げ，それは新史料の増加や個別的研究の蓄積としてだけでなく，近代建築史のそれぞれの時期やそれぞれの動向に対するこれまでの評価をかなり変化させてきている。今回，このような過去10年間の研究動向にもとづいて，改訂を行うこととした。

改訂の骨子は次の３点である。

第一に，近代建築史の発芽は，18～19世紀の工業社会が生んだ新しい課題と技術だけにあるのではなく，いわゆる様式建築のなかに生れた新しい動向にも見出されるという見方である。このために，とくに西洋近代の冒頭の編成と作品例が大幅に変わった。第二に，合理性の追求とその達成を中心にすえたこれまでの近代建築発展のプロットに対する反省である。このために，西洋近代においては，これまで比較的軽視されてきた伝統性や風土性や個性に根ざした新しい表現を追求する流れを，それぞれの時期について明らかにするための章・節編成と作品選択が行われた。日本近代についても，とくに欧米近代建築の導入以後において，これまで非近代的として軽視されていた流れを表現性の高さという視点から見直して，作品を選択した。第三に，第二次世界大戦をはさむ1930年代と50年代の時期を，内容的には同質の発展段階と考え，所謂 CIAM 的な近代建築への批判と反省が明らかとなった1960年前後を近代と現代の区切りとし，しかもこの現代の動向のなかでは，欧米と日本とを分けて扱う必要はないと考えた。したがって本書は，西洋近代，日本近代，世界現代の３部によって構成されることになったのである。

われわれは，本書のとった近代建築史の全体編成が結論的なものだとは考えていない。近代建築史は，常に変化してゆく建築の現代的課題が生みだす新しい視点から見直され書きかえられるという，本来的性向を持っているのであろう。

この改訂にあたった近代建築史分科会の委員は，近江栄，岡田新一，佐々木宏，長谷川堯，三上祐三，村松貞次郎(幹事)，山口廣(幹事)，山本学治(主査)，横山正であり，全体の編集方針は全員で討議し，作品選択と解説は，西洋近代を山口・佐々木・山本が，日本近代を村松・長谷川・近江が，現代を山本・岡田・三上が，それぞれ担当した。

1975年11月

日本建築学会　建築歴史・意匠委員会

目　次

I　西洋近代

解　説 ……8

1　近代化への胎動 ……9

a　近代思想と建築　9

理想都市／新しい形態の追求／伝統形態の洗練／様式建築での新技術／新しい課題と伝統形態の調和／新しい町造り

b　産業革命と建築　15

新しい技術の成果／新しい技術と建築／新しい建築課題

c　建築の近代化　25

イギリスでの開幕／アールヌーヴォーとユーゲントシュティル／ワグナーとウィーンの人たち／バルセロナのガウディ／ペレーとフランスの先駆者たち／ペルラーヘとオランダの先駆者たち／ヨーロッパ諸国の先駆者たち／アメリカ合衆国―ニューイングランドの建築家たち／アメリカ合衆国―中西部の建築家たち

2　近代建築運動 ……39

a　新しい表現を求めて　39

イタリア未来派／ドイツ表現派／アムステルダム派／デ・スティル派／ソヴェト構成派／アール・デコ／立体派／バウハウス―ワイマール

b　国際建築運動　48

バウハウス―デッサウ／工作連盟運動／ＣＩＡＭ／国際競技設計

3　近代建築の展開と定着 ……57

a　国際建築の普及　57

ドイツ／オーストリア，スイス／フランス／ベルギー，オランダ／イギリス／北欧／イタリア／スペイン／東欧／アフリカ諸国／ソヴェト／アメリカ合衆国／南米

b　技術の展開　70

高層建築／鉄筋コンクリートの技術／鋼と軽金属の技術／発展した技術の成果

c　伝統の継承と再生　78

イギリス／フランス／オランダ／イタリア／ドイツ／ソヴェト／アメリカ合衆国

d　風土との調和　83

北欧／フランス／スイス／イギリス／オランダ／ドイツ／イタリア／アメリカ合衆国／スペイン／諸国

II　日本近代

解　説 ……92

1　西欧化の時代 ……93

a　新課題への対応　93

新しい課題への対応／来日建築家の活躍

b　伝統と西欧化　96

工匠たちの努力の開花

c　西欧建築の習熟　99

学習の開始と成果／学習の深化

2　新しい技術と思想の導入 ……104

a　新技術の導入　104

新技術の導入／新構造による事務所建築

b　新思想の導入　108

セセッション的意匠の導入／表現主義をめぐって

3　近代化の時代 ……113

a　表現の模索と充実　113

近代技術と様式表現の結合／日本的伝統の解釈と表現

b　合理主義建築の出発と展開　123

戦前昭和近代合理主義の進行／伝統と近代主義の交錯／構造技術の可能性を求めて／近代主義の展開と克服

III　世界現代

解　説 ……134

1　都市文明の進展 ……135

a　高層化と複合化　135

b　都心の再開発　137

c　ニュータウン　138

d　技術の成果　139

2　現代を拓いた作家 ……141

a　アルヴァー・アルトー　141

b　エーロ・サーリネン　142

c　ルイス・カーン　143

d　丹下健三　144

3　環境のアメニティを目指して ……145

a　都市の広場　145

b　新しい住環境　146

c　表現性と記念性　147

d　手法の展開　149

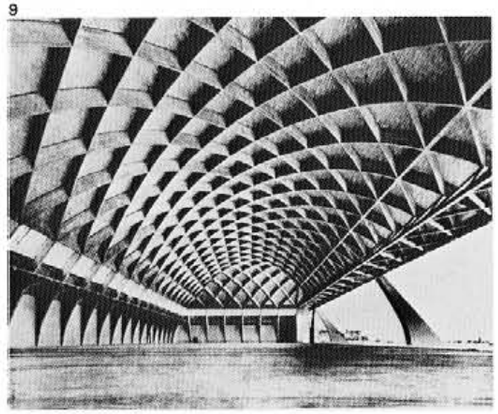
作品目録　153

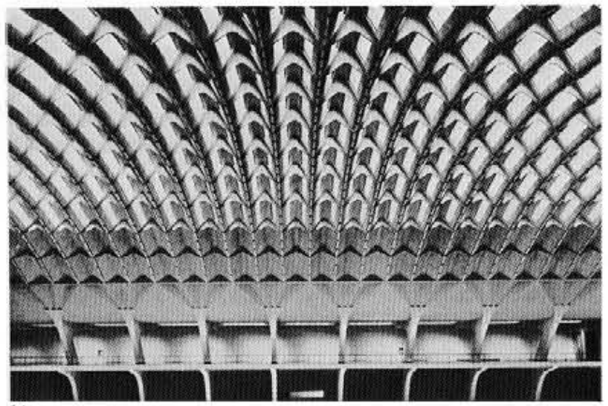
版権所有者・出典リスト　162

近代建築家年表　巻末

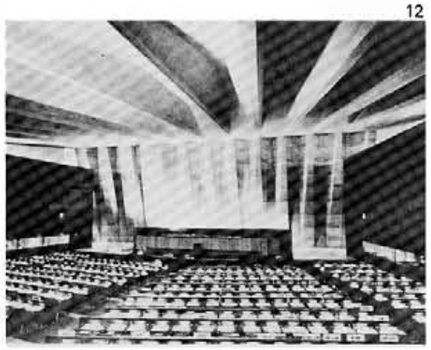
8

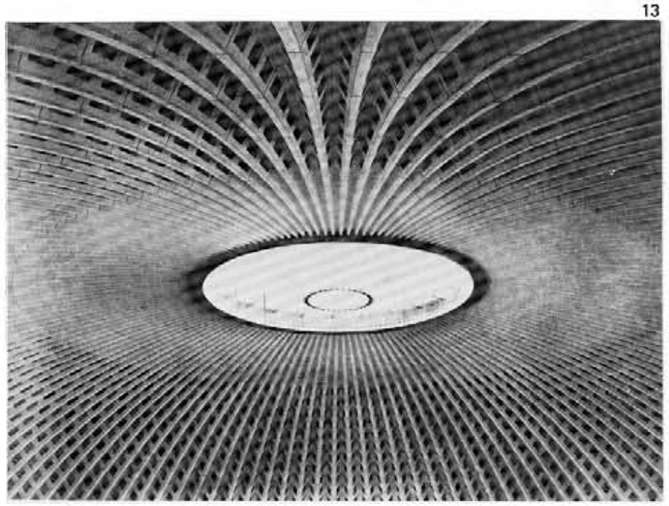
10

9



11

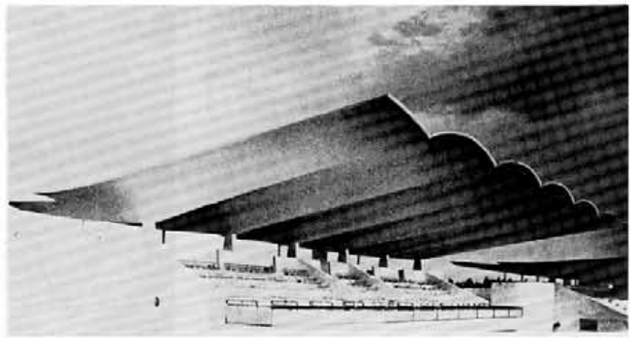
8　フィレンツェ競技場／P. L. Nervi, Firenze, 1932年
9　格納庫／P. L. Nervi, Orvieto, 1936年
10　格納庫／P. L. Nervi, Orbettello, 1939～41年
11　トリノの展示ホール／P. L. Nervi, Torino, 1950年
12　ユネスコ本部の会議場／M. Breuer, P. L. Nervi & B. Zehrfuss, Paris, 1958年
13　スポーツ・パレス／P. L. Nervi, Roma, 1959年
14　アルヘシラスの市場／E. Torroja, Madrid, 1935年

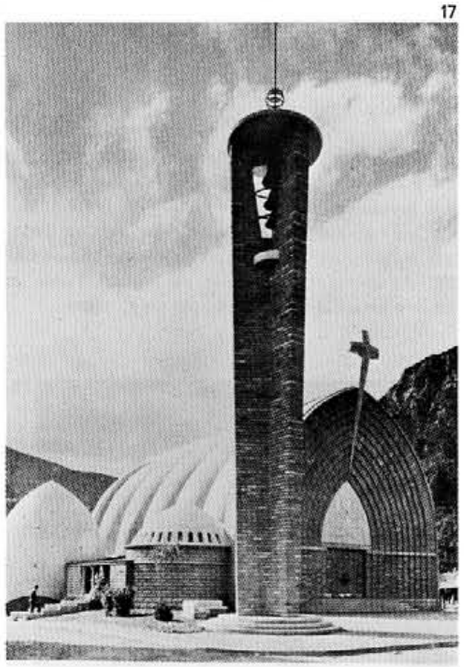
12


13


14

15


16

17


18

19

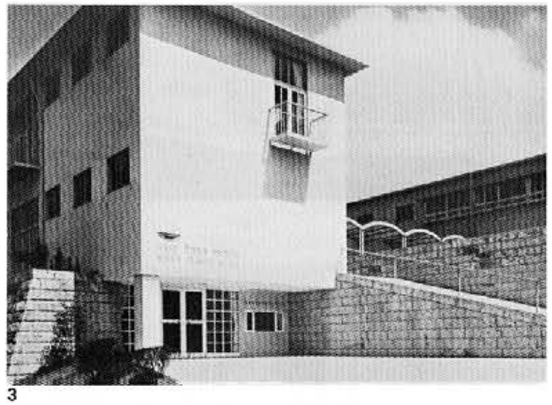
20

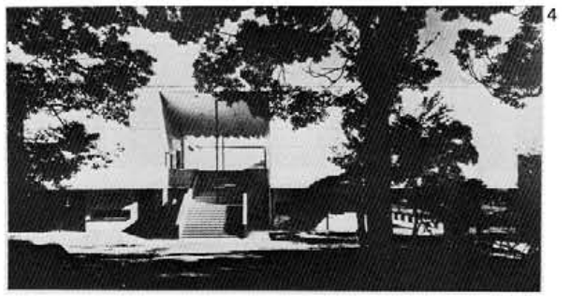
15　フロントン・レコレトス／E. Torroja, Madrid, 1935年
16　ザルズエラ競馬場／E. Torroja, Madrid, 1936年
17　教会／E. Torroja, Pont de Suert（スペイン）, 1952年
18　ジョンソン・ワックス本社／F. L. Wright, Racine, Wisconsin, 1939年
19　ジョンソン・ワックス研究棟／F. L. Wright, Racine, Wisconsin, 1949年
20　グッゲンハイム美術館／F. L. Wright, New York, 1943～60年

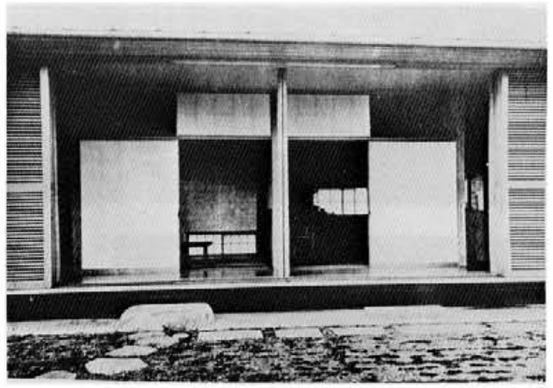
3-b-2　伝統と近代主義の交錯

1

2

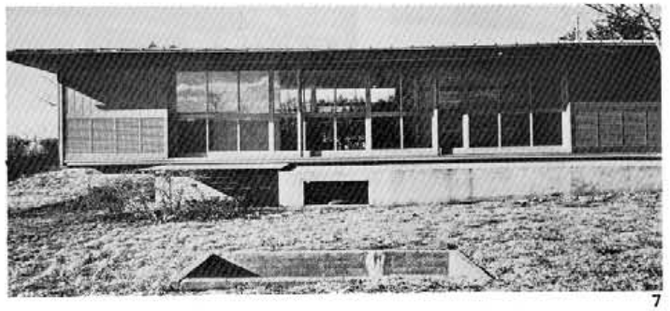

3

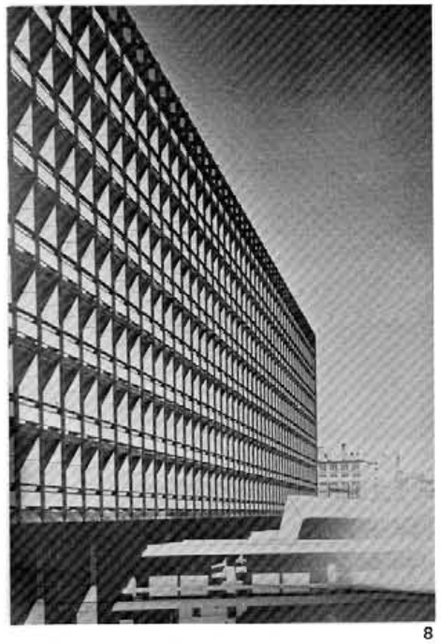

4


5

1　パリ博日本館／坂倉準三，パリ，1937年(昭和12)
2　大阪中央郵便局／逓信省経理局営繕課(吉田鉄郎)，大阪，1939年(昭和14)
3　東京逓信病院看護学院／逓信省経理局営繕課(小坂秀雄)，東京，1950年(昭和25)
4　鎌倉近代美術館／坂倉準三，鎌倉，1951年(昭和26)
5　森邸／清家清，東京，1951年(昭和26)

6


7

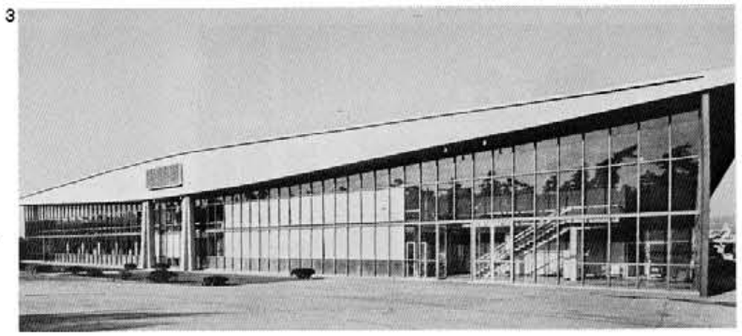

8

6　広島平和記念公園計画／丹下健三，広島，1952年(昭和27)
7　斉藤邸／清家清，東京，1952年(昭和27)
8　東京都庁舎／丹下健三，東京，1957年(昭和32)

3-b-3　構造技術の可能性を求めて

1

2


3

1　リーダーズダイジェスト東京支社／A．レーモンド，東京，1951年(昭和26)
2　日本相互銀行本店／前川国男，東京，1952年(昭和27)
3　図書印刷原町工場／丹下健三，吉原，1955年(昭和30)

3-b　新しい住環境

共同住宅の大量生産と工業化は生産の論理を前面に押しだし，ハウジングの本質を片隅へ追いやってしまう。その結果，画一的無味乾燥，アイデンティティ欠落，コミュニティ不在，プライバシィ欠如という本質的な問題を引き起こしやすい。このような傾向に対して，落ち着いた定住環境をつくりだそうとする傾向がある。「居住者のために――」ではなく，「居住者と共に――」という姿勢によってつくられる。したがって居住者の人間的スケール，近隣関係が重んぜられる。通俗的な美学を認識する立場に立つヴァナキュラーな傾向もここに含まれる。また古いものを尊重し新しい環境の中に保存する歴史的環境への連繋の手法もとられている。しかし，このような新しい住環境をつくるためにはどのくらいの住戸密度を限度とするか，それを見極めることが重要であると思われる。

1

2

3

4

5

6

1　ハーレン・ジードルンク／Atelier 5, Bern（スイス），1960年
2　キンゴーの連続住宅／J. Utzon, Helsingør（デンマーク），1960年
3　ラマガンの集合住宅／Neumann, Hecker & Sharon, Ramat Gan（イスラエル），1965年
4　アビタ 67／M. Safdie, Montreal, 1967年
5　シーランチ／C. Moore, D. Lyndon, W. Turnbull, R. Whitaker, Gualala, Sanoria County, California, 1965年
6　ピムリコの集合住宅／Darbourne & Darke, London, 1967年

7

8

9

7　桜台コートビレジ／内井昭蔵，東京，1970年　8　河原町高層アパート／大谷幸夫，川崎，1973年　9　基町長寿園高層アパート／大高正人，広島，1971年～

3-c　表現性と記念性

近代建築運動の主理念のひとつに，過去の様式建築が持っていた装飾性の否定，いいかえれば過去の建築形式や装飾要素を固執することへの反抗があった。それはたしかに1920～50年代の新しい建築の発展に重要な役割を果たしてきた。けれどもこの造形的禁欲主義は，近代建築の新しい形式が社会に普及し定形化するにつれて，逆にその表現力の拡大をせばめ，人びとが機能性以上のもの（記念性や象徴性）を期待する分野に広がることを不可能にする制約と感ぜられるようになった。60年代に入ってから，新しい技術の可能性を感動的な表現に結びつける想像力，マッスや空間や多様な素材の追求から強烈な表現を創りだす彫刻的造形力があらためて重要視されはじめた底流には，このような状況がある。その動向を示すこれらの作品は，これからの建築がこれからの人間と深く精神的に結びつくために不可欠な追求のひとつを示している。

1

2

1　ブラジリア議事堂・事務棟／O. Niemeyer, Brasillia, 1960年
2　エール大学クライン・タワー／P. Johnson, New Haven, Connecticut, 1966年